

はじめに

私は資料館の館長山田でございます。

今日は企画展に関連いたしまして「本土決戦・登戸研究所・中野学校」というテーマで講演させていただきます。

現在資料館では「本土決戦と秘密戦」というタイトルで企画展を行っております。本土決戦の実態、これは、松代大本營の建設だとか、東京湾湾岸要塞、こういうものを取材いたしまして、どれくらい本土決戦が現実のものになっていたかということ、それから、その本土決戦の中で、登戸研究所、中野学校という、まさに秘密戦を遂行しようという機関がどういう役割を果たそうとしていたのか、そういうことを企画展で検討しております。

もうご覧になった方もいらっしゃるかと思いますし、まだご覧になっていらっしゃらない方は、この話の後、ご覧いただきますとよりお分かりになりやすいかと思います。宜しくお願いいたします。

それでは、皆さんのお手元にあるプリントとそれから前の画面を使ってお話をさせていただきます。

I <秘密戦>における登戸研究所と中野学校の役割

1 <秘密戦>とは何か

まず、今日のお話なのですけれども、実は昨年、2013年4月に明治大学の中野キャンパスというのができました。これはJR中野駅の北口に新しいキャンパスを作ったんですけれども、実はそこはかつて陸軍中野学校があった場所なんですね。そして多くの方はご存じの、この明治大学の生田キャンパスというのは、かつて陸軍登戸研究所があった場所です。この中野学校の跡地と、登戸研究所の跡地が、共に、まったくこれは偶然なんですけれども、この現在明治大学のキャンパスになっている。[明治大学は]そう言うところが好きなのかとよく聞かれるのですけれども、戦後、この生田キャンパスも中野キャンパスももちろん戦後にキャンパスになったところなんですけれども、そういう、大学を設置しようという広い場所はですね、やはりもとをただせば、軍関係っていうのが多いんですね。今でも、戦後できた大学のキャンパスっていうのはもとの軍事施設あるいは中島飛行機の工場とかそういうところが多いんです。ちなみに明治大学和泉キャンパスというのはですね、京王線の明大前という駅のところにありますが、あそこは戦前からあそこにキャンパスがあったんですけれども、大正時代には、あそこは陸軍火薬庫というものがあまして、和泉新田火薬庫という、それが立退いた後に明治大学が買い取りまして、当時予科、というものがあまして、予科のキャンパスを作ったんです。そういうものもありますから、明治大学はですね、その陸軍のお世話になっているわけじゃないんですけれども、関係するところに立地しております。

実は、中野学校と登戸研究所、両者を結ぶキーワードは秘密戦、つまり、秘密戦、というの、一番わかりやすいもので言えばスパイ活動とかあるいは謀略活動ということになりますけれども、秘密戦のための人づくりは中野学校、物づくりが登戸研究所、こういう関係です。ですからこの中野学校と登戸研究所っていうのは、この登戸研究所で開発された色々な兵器、資材を中野学校を出た人たちが使用する。こういう関係にあるんですね。ですから、中野学校と登戸研究所は日本陸軍の秘密戦の両輪という風に言っていていいわけです。で、今日は、この日本の秘密戦についてまず概略を説明いたしますけれども、主として本土決戦におけるこの中野学校と登戸研究所の関係・役割ですね、これを最近分かったことを含めてお話をしたいと思います。

これは現在のこの生田キャンパスです。私たちが今いるのは、この中央校舎というところがありまして、ここに、学生たちがいるわけですね。皆さんも今ここにいます。

これは終戦直後、1947年にGHQが撮影した航空写真で、私たちが今いる場所はこの場所ですね。実はこれはお気づきの方もいらっしゃると思うんですけども、この明治大学のキャンパスの道筋というのは、ほとんど登戸研究所時代の道筋と変わっておりません。建物はもう、登戸研究所時代の建物は一つしか残っていません。それは現在資料館になっています。ここに映っている建物ですね。他の建物はみなキャンパス整備の関係で今もうなくなってしまいましたけれども、このキャンパスの中にはですね、登戸研究所を偲ぶものっていうのがいくつもあります。例えば、坂を上ってきたところにある神社です。弥心神社というふうに戦時中は言っていました。現在は生田神社という名前です。それから、正門の裏にはですね、このように非常に大きな、高さ3mもある動物慰霊碑、これは現在でも大学は毎年11月に動物慰霊祭をやっているんです。それは大学の中でも実験動物を今でも使っているからですね。しかしその慰霊碑そのものは実は大学が建てたものではなくて、登戸研究所が建てたものを大学も使っている、そういう関係になります。写真では見づらいたんですけども、大きく動物慰霊碑と書いてありまして篠田鐮書とあります。篠田鐮っていうのはこの登戸研究所の所長だった人です。終戦時、陸軍中将ですね。ご覧になると分かるんですが、この裏側に、昭和18年3月陸軍登戸研究所建之というふうに彫り込んであります。その他、図書館前に消火栓、それから食堂館前に同じく消火栓が、陸軍の星のマークが入ったものが現在残っております。で、これが登戸研究所時代の最後の建物になります資料館。現在、登戸研究所資料館になっています。中に展示室があります。この講演の後には、4時まで開館しておりますので、是非まだご覧になっていらっしゃる方はご覧いただければと思います。

次に中野キャンパスというか、皆さんこれは中野キャンパスではなくて、戦前の地図です。ここに陸軍憲兵学校がありまして、当時の国鉄が省線ですね、中野駅ですね、[以下、地図を指して]この部分が中野学校です。現在の地図をちょっと見てみますと、こうなります。JRの中野駅がこうあって、北口、で、このあたりが全部再開発されまして非常に今綺麗になっています。で、実は明治大学のキャンパス、この部分でして、これが現在明治大

学の中野キャンパス，それから隣が平成帝京大学ですね，それから，この部分が今年の4月でしょうか，出来上がります早稲田大学の留学生会館ですね。それからここが，東京警察病院です。実は，かつての中野学校というのはこのエリアですね。非常に広いんです。ちょっとさっきの地図で見ますと，この部分ですね。ですから現在の明治大学の中野キャンパスは中野学校の跡地にあります。というのは実はこのあたりにちょこっとあります。やはり軍の施設って広いんですね。こういう状態ですね。現在，この東京警察病院と早稲田大学の留学生会館の丁度この境目の処に，こういう石碑が立っています。「陸軍中野学校跡」，これはもちろん戦後建てられたものです。これは東京警察病院の敷地の中にありますが，目立ちません。よっぽど好きな人たちか，興味のある方たちじゃないとこれを見つけることは非常に難しいです。[「陸軍中野学校跡」石碑写真を指して]こういう写真，これだときれいな感じといいですか，[実際は]周りに木がいっぱい生えていまして，こう接近しようとするともう夏は藪蚊の大群ですね，それが中野学校の最後の守りを固めるというわけです。

で，今日お話しする，秘密戦というのは何かということです。もうすでに秘密戦，秘密戦という言い方をしてきました。これは戦争には必ず付随いたしますけれども，歴史には，滅多に記録されない，裏側の戦争ということです。それから，戦時に限らず，平時，普通の時にも密かに行われている水面下の戦争。ですから，戦争と平時というのはですね，截然と区別されるわけですが，実は秘密戦っていう分野においては，平時も戦時も大きな区別はありません。ここは曖昧なわけです。ですから，この，秘密戦には，いろいろと非合法の部分というのが付きまとっているわけです。

秘密戦には4つの要素がございます。まず防諜，すなわちスパイ防止，諜報，諜報はスパイ活動そのものです，謀略というのは相手の国を混乱させることですね，たとえば，風船爆弾なども，アメリカ本土を混乱させるために放たれた謀略兵器，これは登戸研究所で開発されたものです。それから宣伝，これは戦時のプロパガンダですね，都合の悪いことは隠し，都合のいいことは大々的に誇大の宣伝をするということですね。現在でも，情報戦，というような言い方でくられる場合もあります。多かれ少なかれどんな国もこういう秘密戦に近いことをやって，あるいは秘密戦そのものを現在でも遂行しているわけです。

2 陸軍登戸研究所

この秘密戦の担い手というところで，まず一つ，登戸研究所は，ここにも書きましたが，陸軍における秘密戦のための兵器，資材の専門開発機関です。海軍にはこういうところはありません。海軍ももちろん秘密戦，情報活動はやっていますけれども，このように総合的な秘密戦のための兵器開発機関と言うのは持っていません。陸軍は最初，陸軍科学研究所というのをですね，これは大正時代につくるんですけども，その中に，陸軍科学研究所秘密戦資材室，通称篠田研究室この篠田という名前は先ほど出てきました登戸研究所の所長になる篠田鏖，終戦時には中将です。この人は陸軍士官学校26期を出た，本職のプ

ロフessionionalな軍人ですけれども、同時に東京大学から工学博士号を授与されている理系の軍人ですね。で、この陸軍科学研究所の中に、この秘密戦のための部屋が一つありました。もちろんこれ務めていた人はほんとに数人に過ぎません。

しかし、それが10年後、陸軍科学研究所登戸実験場というものができます。まさにこの場所に実験場、これは主に電波兵器のための実験の行う、そういう施設ができました。ですから、登戸研究所っていうのは、この1937（昭和12）年ですね、盧溝橋事件があって、日中戦争始まった年ですけれども、まさにその同じ年にここに実験施設ができたということです。で、日中戦争の拡大とともに、1939（昭和14）年に陸軍科学研究所登戸出張所という名前になるのですが、実はこの1939年、というのは一つの大きなポイントでして、総合的な秘密戦のための開発機関に登戸研究所が成長した年です。

あとでまたお話をいたしますけれども、この年、1939年に第一科、これは電波兵器、二科が毒物・薬物・生物兵器・スパイ用品、第三科は偽札、こういう陣容になっています。そして、このあとですね、1942（昭和17）年10月に第九陸軍技術研究所という名前になりまして、これは登戸研究所の最終的な正式名称です。第九陸軍技術研究所。ですからこの名前の変遷を見て頂くと、実は、一度も登戸研究所っていう風になったことはないんです。登戸研究所っていうのはあくまでも通称です。しかも陸軍の内部ではそれで通じるわけで、実はこの、1937年段階では実験場というふうに大体言われているんですけども、登戸出張所になった段階ぐらいいから内部では登戸研究所、登戸研究所と呼ばれるようになってくるわけです。ま、約して登研^{とけん}という言い方もありました。また、務めていた人のバッジは、登戸の「の」、ひらがなの「の」というちょっと間の抜けた感じのバッジですけれども、「の」というバッジを着けていました。で、戦争末期、1945（昭和20）年5月に本土決戦に備えて長野県の伊那地方などに、登戸研究所は移転しました。これはまた後でお話をしますけれども、ほぼ同じころ、中野学校も群馬へ移転をするわけです。

3 陸軍中野学校

一方、今お話ししました中野学校ですけれども、日本陸軍における秘密戦の要員を養成する専門機関です。1938年、登戸研究所がこの生田にできた翌年ですね、日中戦争始まって半年ぐらいたったころに、後方勤務要員養成所、いくら何でもスパイ養成所という名前はつけられませんから、なんだか良く判らない名前、後方勤務要員養成所という名前で、もともとは九段にこれは置かれました。愛国婦人会の会館の別館に間借りをしておりました。

それが翌年1939（昭和14）年に中野のJRの現在の中野駅北側に移りました。そこは旧電信隊の跡地です。その後も陸軍中野学校っていう看板が掲げられたわけではなくて、通信学校とか通信研究所という看板が掲げられておりました。もちろん、名前は陸軍中野学校というのは正式の名前でして、ちゃんとした陸軍中野学校令という法律に基づいて、法律って言っても当時は議会で審議する法律ではありませんけれども勅令=天皇の命令、こ

れによって陸軍中野学校という名称になります。1940（昭和15）年ですね。

で、これは太平洋戦争中、1944（昭和19）年、静岡県の一俣に、これは天竜川に沿ったところなんですけれども、遊撃戦、ゲリラ戦の要員を養成するためにここに分校を作りました。そして先ほどもちょっと言いましたけれども、大戦末期、1945（昭和20）年の4月、本土決戦に備えて群馬県富岡町に移転をします。これは中野学校の本部が移転します。ですから同時に一俣分校は静岡にあるんですね。で、1938年の後方勤務要員養成所から1945年までにこれだいたい一年間の養成でほとんど新しい人たちが入ってくるわけなんですけれども、2,131人が卒業した。分かっているだけで、戦死した方が289名、行方不明の方が376名います。

4 <秘密戦>の担い手たち

この秘密戦の担い手、人づくりの中野学校、物づくりの登戸研究所、実はともに中野学校も登戸研究所も参謀本部の第八課というところ、参謀本部の第八課というのは、通称「謀略課」というすごい名前がついているところでして、その指揮下にあります。それは一応官制上、役所の建前上は、陸軍大臣に隷属して、あるいは登戸研究所は後に兵器行政本部というところに隷属してはるんですけど、具体的な中身、命令をだしてくるのは、この参謀本部第八課です。

そして、こういうところ[中野学校と登戸研究所のこと]で物が作られ人が作られ、そしてどういうところがスパイ活動をやるのか、秘密戦をやるのかっていいますと、中心になっているのは関東軍の情報部です。ハルビンに本部がありました。関東軍の情報部ではですね、登戸研究所で開発した軍用犬の追跡防止剤「え号剤」、これは軍用犬の嗅覚を一時的にマヒさせてしまう。つまりあのスパイがどこかに潜入した時に困るのは犬にほえられること。犬を無力化する、無力化すると言っても殺してしまっただけでは潜入したということがわかってしまいますから、殺さないで時間が経てば元通りになるけれども嗅覚を失ってしまっただけで追跡できないという薬。これは登戸研究所で開発をいたしました。これは登戸研究所資料館にも若干資料がありますけれども、面白いのが、実験をするために当然軍用犬を借りてくるわけです、軍用犬を借りてきてまして、薬が効くかどうか確かめるんです。その時の軍用犬を借りる一日の日当が文書で残っているんですけども、軍用犬についてくる軍人の日当よりも軍用犬の日当の方が高かった。それだけ軍用犬というのは重要な兵器だったんですね。そんなこともわかります。

それから、スパイ活動、秘密戦というのは、主に憲兵隊が行っているんですね、ですから、憲兵を養成する憲兵学校では、『秘密戦関係』と題するテキストがありました。これは資料館にも展示しています。憲兵学校は全国にいくつかあるんですけども、必ずこういうテキストがあったようです。中を見ますと、実は現在の警察の鑑識の仕事、これに近いことが随分書かれていますね。指紋からの捜査とか。スパイを取り締まるための捜査と、同時にスパイをやる為のテクニックというのはまさに表裏一体なんですね。つまり、指紋

で捜査できるかということ、いかに指紋を残さないかという技術が必要です。ですから、スパイの活動を防止するために知れば知るほど、スパイ活動をやりやすくなるというこういう関係にあるということですね。

Ⅱ 日本軍の〈秘密戦〉の歴史

1 日清・日露戦争期

まず簡単に日本軍の秘密戦の歴史を紐解いてみたいと思いますけれども、日清日露戦争期、参謀本部直属のスパイ、情報収集者が、朝鮮半島や大陸に派遣されました。

日露戦争期からシベリア出兵期にかけて、代表的な人物を一人挙げろと言いますと、石光真清^{いしみつ}というスパイがいます。普通スパイというのは歴史に名を残さないんですけど、この人は非常にたくさん手記を残しておきまして、この人の遺族が戦後この石光氏の手記を出版したんです。ですから石光真清という人が情報工作に当たっていたということが、私たちにもわかるわけです。それによりますと一般人に変装して情報収集、裏工作に当たる。例えば石光自身は洗濯屋さん、あるいは写真館の主に化けてですね。これ、すごいんですよ。ハルビンにきくち写真館という写真館をつくりまして、これまだ日露戦争前です。日本人がほとんどいない頃にそこに写真屋をつくって、ロシア軍をおよがせます。ロシア軍に雇われて、ロシア軍の施設、東清鉄道、これ後に満鉄になりますけれど、これの写真を撮りにいってる。一番重要な情報を写真にのこして 表向きはロシア軍に納入しますが、焼き増しして日本軍に渡す。こういうことを日露戦争前からやっていた人。しかし、もちろんこの人ひとりではできません。

一番情報のつなぎをやっていた重要な人たちっていうのは僧侶、坊さんです。坊さんっていうのはどこに出没してもおかしくないわけです。布教の為っていう。どこに行ってもおかしくない、そういう特性。だから大体商人に化けるか坊さんに化けるか。実際、プロフェッショナルな軍人が僧侶に化けてスパイ活動をやっているというのは結構ありました。これは石光の手記にも出てきます。また、もう一つ、むしろ数として多いのは、本当の坊さんがボランティアでスパイもやっている。ボランティアっていう言い方はおかしいかもしれませんが、自主的に日本人に協力しているうちにセミプロのスパイになっていってしまう。そういう人けっこういます。日露戦争期からしばらくはこういう風実際に人が行って。石光っていうひと陸軍士官学校を出たプロフェッショナルの軍人なんですけど、軍籍から一度離脱してスパイ活動をした。どうやって石光は生計をたてていたかという、日本に帰ると小さな郵便局の局長さんでした。で、そこにはいた試しがありません。で、常に局長で一応給料もらって、それで家族を養いながら、ほとんどを大陸で活動。こういうことをやっていた。

で、この日露戦争期、もう一つ非常に派手な存在でありました情報収集謀略工作の担い手は、明石元二郎^{もとじろう}が代表的です。ストックホルムなどを拠点にして軍事情報を収集したり、

あるいはロシアの革命派＝ポーランドの独立派に武器・資金援助をしていた。これは、明石元二郎については比較的書かれたものも多いのでご存知の方もいらっしゃると思いますが、レーニンなんかにも密かに会って武器や資金を援助もしていた。明石の情報活動を現在調べてみると、非常に地道な情報収集活動をしていました。ヨーロッパで発行された新聞を丹念に集めてそれを分析、これけっこう重要な情報がわかるんですね。すごく派手に見える革命派に対する援助という謀略の部分がクローズアップされるんですけども、実は地道な情報収集という事も行っていて、本当はこっちの方が実は重要なんですね。なぜなら独立派が明石の援助で動き始めるのはほとんど日露戦争の終りかけの頃。ほとんど講和会議が行われるころになってようやく独立運動が動き始める。ですから、明石の活動としてはむしろ情報収集というのが重要。

また、中国大陸に於けるいわゆる特務機関、諜報謀略機関、これらがありました。

2 第1次世界大戦期（1914～18年）

第一次世界大戦になると欧米で科学技術を応用した秘密戦が非常に発達しました。暗号、通信の傍受、盗聴、秘密撮影、宣伝、戦時プロパガンダなど、こういう技術が発達します。日本では暗号、暗号については暗号をどこから学ぶかと云う事がけっこう大事なんです。なぜなら、後に日本と対立するような国から暗号を学びますと、どういことを学んだかと云う事が相手の国にわかってしまい、暗号技術が筒抜けです。ですから日本陸軍が暗号技術をどこから学んでいたかという、ポーランドから学んだんです。ポーランドとは日本はまず戦争することはありません。しかもポーランドはロシアに隣接しているので、ロシア情報が入る。こういった理由でポーランドから学ぶ。

しかし日本の当時の暗号の技術のレベルはあまり高いものではなかったもので、1920年代の軍縮会議、ワシントン会議の際に日本側の情報は英米に筒抜けだったと言われていました。どうしてそれがわかったのか。当然、英米がそれを発表するわけがありません。日本軍の情報が筒抜けだったなんて。どうしてわかったのかといいますと、これ秘密戦の特性ですけども、秘密戦の実態がわかるというのは唯一、関係者が後に曝露。実際に暗号解読にあたっていたアメリカ人あるいはイギリスの人たちが後に本を書いたりして明かしてしまう。それで日本側も「ああ、そうだったんだ」と気づかれていたことに気が付いた。それで[世界に後れをとっていたことに]気が付いた日本陸軍は陸軍科学研究所の中に秘密戦資材研究室を設置しました。これは先ほどお話したところです。

3 満州事変期（1931年9月～）

満州事変期になりますと、日本が段々と国際的に孤立していきます。

それからヨーロッパではナチスドイツが再軍備を行うということと、海軍軍縮条約が1936年12月に失効、それで世界的な軍拡競争時代になります。だから当然スパイ活動も活発に。航空技術の飛躍的発達の時期でした。またドイツイタリア日本がそれぞれヨーロ

ッパ、アジアで新秩序をめざすという動きをとりましたので、世界的に情報戦・秘密戦が活発に。

4 日中戦争期（1937年7月～）

そして日中戦争期ですね。実はこの日中戦争というのは始まってすぐに、単なる日中間の戦争ではなく、構造的に対欧米との戦争という形になってきてしまう。なぜなら欧米諸国側からみると、日中戦争というのは日本による中国独占の戦争、そう見えてしまう。だから当然当時の蒋介石政権を支援してこれを阻止しようとしします。日本は中国と闘っているんですけども、中国の背後にはイギリス、フランス、ソ連、そしてそのさらに背後にはアメリカという風に、どんどん中国の後ろに敵がついていっちゃう。ですから日中戦争は対中国の戦争なんですけれども、次第に対欧米戦争という様相を呈していきます。ですから秘密戦の分野では、日中戦争で、水面下で対欧米戦争が始まったということになる。上海・香港などを舞台にして英米仏ソの情報機関との戦争が始まります。

ですから日本でも参謀本部に第8課というのができます。1937年です。日中戦争が始まったその年の11月です。でそして、第8課が中心となって中野学校をつくり、登戸研究所をさらに総合的な秘密戦の資材供給基地にしていくと。第8課ができたことでまさに中野学校や実質的に指揮する中枢が成立したということです。

中心になりましたのはこの三人、秋草俊、福本亀治、岩畔^{いわくろひでお}豪雄、これらの人たちはこの後も日本の秘密戦で非常に主動的な役割をはたす。秋草は中野学校[ここではその前身の後方勤務要員養成所]の初代所長になりました。実はこれをモデルにした映画もあるんです。陸軍中野学校と言います。市川雷蔵を主演として5作ぐらい作られました。実際の後方勤務要員養成所は1938年1月につくられました。

そして、従来からの憲兵・特務機関を中心にした秘密戦の遂行も行われておりまして、登研が機能を強化し、三科体制、一科・二科・三科の三つの科ができ、中国に対する通過謀略戦も1939年から実施されます。日中戦争はなかなか武力戦では解決しないので中国の経済を混乱させようという、こういう観点から、偽札を大量にばらまいて中国経済を混乱させるというこういうことなんですけど、実はこれ、だんだんなんかおかしいことになりました。偽札をまいても、なかなかそう簡単に経済謀略は起きないんですね。しかし偽札は物が買えちゃうんです。だからだんだん偽札を使ってものを買うっていうことが中心となっていきました。当時の金額で40億円相当の偽札を印刷して中国で物資の購入に充てました。これは資料館でも展示をしているところです。

5 第2次世界大戦期（1939年9月～1945年）

第二次世界大戦期になりますと、これは一方でソ連との関係が緊張するんですね。白系ロシア人・朝鮮族の人を使ってソ連に潜入させるというこういう活動が活発に行われます。

1940年の9月に日独伊の三国同盟が締結されまして対英米関係がさらに緊張してきます

と、アジア諸国・地域別の秘密戦が展開されていきます。まさにそれに本格的に備えるために中野学校、これはまさに、さきほどの後方勤務要員養成所が拡充されて中野学校となりました。

ちょっとレジメに付け足したいんですが、太平洋戦争開戦前から北米、アジア、アジアではインド・ビルマ・マレー・フィリピンこういうところが重要視されました。ここにスパイが配置、あるいは工作員が送り込まれる。

あるいは、一番これ、組織的に行われたのは対ビルマ工作。ビルマは当時イギリス領ですね。独立運動の党首を密かにビルマから日本陸軍が連れ出しまして、中国の海南島や台湾で訓練をして、武器をもたせてまたビルマに戻す。これ開戦の前年1940年ごろからこういうことをやっていました。そういう中で、非常に日本に着目されて重要な働きをした一人が、アウンサン。アウンサンスーチーさんのお父さん。ビルマでは建国の父とされている人ですね。最初は日本陸軍の援助のもとに英武装闘争を組織して、開戦と共にこういう訓練を受けた人たちはビルマ各地に散ってスパイ活動、あるいは破壊活動をおこないました。

それから戦争中有名だったのは、マレー。当時は英領マレー。マレーに対する活動というのは、私ぐらいの、わりと年配の人は怪傑ハリマオウというのをご存知の方が多いと思いますが。ハリマオウ工作。あれは嘘の話ではないんです。あ、戦後のドラマのあれは嘘の話です。怪傑じゃなくて盗賊なんです。ハリマオウというのはマレー人ではなくハリマという日本人なんですね。これに日本陸軍が目をつけまして。盗賊団だから神出鬼没。それでこの人たちが訓練しまして、イギリス軍を攪乱する、そういう工作をやった。その首領がハリマオウと呼ばれた人。ところがハリマオウはシンガポール攻略戦の直後、マラリヤで亡くなってしまう。当時の日本ではマレーの虎、ハリマオウ、戦争当時からすごく偶像化された存在として宣伝が行われた。実際は盗賊団の首領。こういうことも日本陸軍の秘密戦の一環として行われました。

太平洋戦争がはじまると、日本陸海軍が非常に期待したのはアメリカの情報が何でも入ってくるということ。なぜなら北米大陸には日系人がたくさんいる。カリフォルニアやハワイに在米日系人がたくさんいる。当然のこととして在米の日系人をスパイとして大量に設置していたんですね。開戦までは非常にうまくいく。ですから北米大陸の情報、ハワイの情報は手に取るように日本の軍部に情報が入ってきた。だから開戦してもうまくいくと思っていた。しかしアメリカもさるもので、開戦とともにアメリカ側は日系人をまるごと隔離。アメリカは一枚上手だった。ですから日本側のスパイ網はアメリカの日系人隔離によってあえなく壊滅。これは後にアメリカ大統領が人権上間違っていたと謝罪しますが、実はこれは大きなねらいは別のところにあったんですね。これはやはり秘密戦の一環ですから、実はスパイ網を壊滅させるためとは言えないので、そういうところも日系人隔離にはあったんですね。

しかし、日本側がそれであきらめたかということ、外務省はですね、外務省は外務省でこ

ういう情報工作をやっているんですね。中立国の人（スペイン人）をお金で雇ってアメリカに潜入させ情報を得る。これはトウコウサク。トウは盗むだけれど、それではあんまり露骨だということで東という字を使って、東工作（トウコウサク）。実際にお金で雇ったスペイン人たちはアメリカで情報を集めて、スペインに持ち帰ってドイツ経由で日本に送ってきた。これは日本が行った情報工作で唯一公文書が現在残っている工作です。

また、陸軍は陸軍、海軍は海軍で独自に秘密戦をやっていた。

ただ、外務省がやっていた東工作、これは結果的には結構色んな情報をつかんでいるんです。例えばガダルカナルに対する反撃、そのための物資がアメリカをいつごろ出たか。そういうことをつかんでいる。それから恐らく原爆につながる技術がアメリカで開発が始まっているというようなことをつかんでいた。しかし、アメリカはこれに気が付き、アメリカ国内のスペイン人スパイ団をほとんど壊滅しました。なんと、イギリス・アメリカはスペインまで追いかけてきて、スペインの本拠地まで発見してしまう。でまあ、そこにいた人たちはちりぢりに逃げて行ってしまうんです。

Ⅲ アジア太平洋戦争末期の＜秘密戦＞

1 潜入・残置工作員の配置（中野学校出身者）

中野学校における潜入工作の話をしめすと、太平洋戦争に於いて、一番人数が投入されたのは対インド工作。戦争始まる前から F 機関と呼ばれる。イギリス軍の兵士の中心はインド兵。インド兵を日本側につけてしまう。こういう工作。インド国民軍を組織する、つまり元イギリス軍捕虜ということになるんですね。日本軍とたたかった兵士たちを、捕虜として扱わんじゃなくて、君たちはインド独立のために頑張ろうと言って。でインド国民軍というのを組織します。で、F 機関を引き継いだのは岩畔機関。さきほど出てきました中野学校や登戸研究所にも関係していた岩畔大佐。この人が引き継ぎました。

インド独立連盟本部をバンコクにおきました。そしてインド国民軍司令部というのをシンガポールにおき、工作員の養成学校、日本でいうと中野学校にあたるもの、スワラジ学院をおきました。宣伝ラジオ放送をやったり、インド人工作員を日本の潜水艦でインド沿岸に上陸させるということをやっています。しかし、これはそう簡単なことじゃないんですよ。インドはすごくたくさん人がいるから、紛れ込ませやすそうですけれど、意外と捕まっちゃう。あんまりそう簡単ではなかったようです。そのうちインド独立連盟と国民軍の幹部が内紛を起こしたりして、なかなかこの工作がうまくいかないんですけど、もともと日本にいたビハリ・ボース、この人はもともとイギリスの官憲に追われて日本に亡命してきたインドの独立運動家なんですけれども、この人と、もともとインドにいた人たちが、なかなかうまくいかない。こういったことでなかなかこのインド工作はうまくいかない。

しかしこれはその後も続けられて、1943（昭和18）年にドイツからチャンドラボースがやってきます。もともとインドにいた独立運動の革命家であるんですけれども、ドイツの

潜水艦から日本の潜水艦に乗り換えて、日本にやってくる。そしてこのチャンドラボースを首班として自由インド仮政府を樹立して、チャンドラボースを自由インド国民軍最高指揮官にしてインパール作戦。実はインパール作戦というのはまさにインド国民軍も参加して、その、インドに国民軍が攻め入るんだという、こういう位置づけでもありました。しかし日本軍はあえなく解体しますので、それでインド国民軍もインドに攻め込むというそういうことにはいかなかった。先ほども少しお話いたしました、対ビルマ工作、南機関という機関が作られて、アウンサンら独立運動家を訓練・支援しておりました。

それから戦争末期になりますと、いわゆる残置工作員。戦後有名になった人では小野田さん。こういう人たちを養成して配置をするということが行われました。

2 沖縄における秘密戦

実は戦争末期、いわゆる遊撃戦、ゲリラ戦というのは沖縄戦においても行われました。沖縄を守備する日本軍第32軍は昭和19年に設立されるんですけども、沖縄本島には、当初は3個師団、後に2個師団それに1個混成旅団が配置されて、この独立混成第44旅団というのが沖縄本島の北部において遊撃戦を展開するという予定でおりました。そして、実際に沖縄戦が行われると、沖縄本島北部^{くにがみ}国頭地区で秘密戦・遊撃戦が行われるんですけども、これ沖縄の人たちには非常に評判が悪いです。つまり、一般住民をスパイ扱いして殺傷するという事件が起きるんですね。実際に^{おおぎみそん}大宜味村の^{とのきわ}渡野喜屋では20人ぐらいの人が米軍の物資を持っていたという理由で遊撃戦部隊に襲われて亡くなっています。この辺りの遊撃戦というのは非常に混乱したやり方ということなんですね。

IV 本土決戦と秘密戦

1 本土防衛から本土決戦に

今回の登戸研究所資料館の企画展の展示は、本土決戦というところに主眼があるわけですが、ここからは本土決戦のお話になります。

実は、戦争が始まった時には、本土決戦という選択肢はありませんでした。本土決戦とやるというのは追い詰められているということですから、最初からそのようなことを想定していたわけではなく、あくまでも最初は本土防衛、あるいは、本土防空だったのです。

ではいつごろから、本土で決戦を行うかという選択肢が出てきたのかというと、サイパン陥落、1944（昭和19）年7月7日のことなんですけれども、サイパン陥落直後の「陸海軍爾後ノ作戦指導大綱」の中に、次の決戦はここで行うという、いくつか地域で候補をあげて計画が立てられました。そこで、本土でも決戦がありうるのだと一つの選択肢として出てきます。しかし、最有力は比島方面、つまりフィリピン方面が決戦の主戦場になるんだと。連絡圏域に来ている人は、沖縄とか台湾、千島、北海道方面でもあり、一番有力なのはフィリピン方面、つぎは沖縄、台湾、本土、千島、北海道、このように決戦が想定さ

れました。昭和19年10月を目途として「決戦準備を概成せよ」という命令が出たわけなんです。

しかし現実には、フィリピンでの決戦、いわゆるレイテ決戦が実際に起きまして、本土での決戦準備は遅れることになります。本土での作戦準備は全く進捗しません。それは当然です。レイテ決戦ということで決戦が発動してしまうわけですから、ここに勝てば本土決戦もあり得ないという、全勢力がレイテ決戦につき込まれてしまうんですね。また昭和19年になりますと、南方資源地帯から日本本土への海上輸送は途絶状態で、物資不足、燃料不足で、本土決戦準備がなかなか進まないのです。むしろ南方の方に資源があるんです。それを日本に運んでいけないんですね。例えば石油ですと、日本本土を養うためには、スマトラのパレンバン油田、これ1つあれば十分なんです。実際そこでは大量の石油が出ているんです。開戦当時だいたい700万トンくらいの石油の備蓄がありました。これが戦争を始めると、1年半くらいでなくなってしまう計算になります。戦争をやりながらそれくらい使うんです。この700万トンという数字ですが、現在の日本の石油消費量の6日分です。ですから経済の大きさは全然今と違うんですね。主に当時石油を使うのは軍です。一般経済では石油を使うのはそれほど大きくないんですね。石炭がまだまだエネルギーの主力でした。しかしその石油が入ってこない。これは輸送船がアメリカの潜水艦に撃沈されてしまう。モノが不足するというので、なかなか本土決戦準備も進まないわけですが、東日本を管轄している東部軍司令部は、10月13日になってようやく沿岸築城、砲台、レーダー建設開始を命令というありさまで、ずいぶん遅れてしまっているわけです。しかし、遅れた本土決戦準備に関しても、唯一、唯二つなのですが例外的に進展したのがあります。

一つは松代大本営建設工事です。なんとといっても総司令部を作らないことにはということで、優先的に人的、物的資源が導入されました。昭和19年11月11日、一並びの日ですが縁起担ぎです、昭和19年11月11日から松代大本営の工事が始まります。

同時に、本土決戦そのものではありませんが、本土決戦の前哨戦としてアメリカを混乱させるための風船爆弾の実戦投入、これも1944年11月始まります。これは11月3日の明治節を期してやる予定だったんですが、ちょっと事故がありまして、11月7日から本格的に始まりました。実際に9,300発、翌年の4月上旬までアメリカに対して風船爆弾の発射は続きます。当初は、牛疫ウイルスという生物兵器、牛を殺傷するウイルスを搭載する予定だったんですが、しかしこれは土壇場で焼夷弾に切り替えられました。しかしこの風船爆弾というものは、決戦兵器というふうには言われることはありますけれども、実際には後方攪乱のための謀略兵器です。

この松代大本営の建設と、風船爆弾の開発、これが唯一進展したものでした。実際にはレイテ決戦が10月に発動されたので、全般として本土決戦準備は遅れに遅れます。

2 本土決戦準備の本格化

その後、いつごろレイテ決戦が断念されたのかということ、1944（昭和19）年12月20日前後です。「20日前後」でどうしてもはっきり分からないかということ、宣言されたわけではないんですね。しかし当時の状態として、大本営がレイテ決戦断念を決心したとしても政府はそれを知りませんでした。ですから大本営がレイテ決戦断念を事実上決めた後で、当時の小磯内閣は国民に向かって「レイテは天王山だったのだ」という演説をしてしまうのですね。しかし、実際には軍部は「レイテ決戦はもうだめだ」といって諦めてしまうのです。そして、軍部はレイテ決戦断念後、急速に本土決戦準備に傾斜をします。

1月には、いよいよ本土決戦のための計画が作られて、3月、4月と具体的な作業が始まっていくのです。しかしモノがないものですから、計画は出来ても、なかなかモノが進まない。実際に本土決戦に際しては、150万もの兵力が動員が招集、あるいは徴集され部隊が編成されますけれども、なかなか武器も行きわたらないのですね。ただ、これは一般的なイメージですけれども、本土決戦のために出来た部隊にはそんなに武器も行きわたらなかつたというイメージがありますが、実は武器はあるところにはあつたんです。本土決戦の精鋭部隊というところには、それなりに武器はありました。それから燃料も備蓄もあつたんです。

それから本土決戦のために、わざわざ関東軍から日本本土に呼び戻された部隊もあります。われわれ多くの日本人にほとんど見えなかつたのは、長野とか群馬とかそういうところに配置されたので、ほとんど知られなかつたんですね。総司令部だけはどんどん建設が進みましたので、総司令部の松代への交代は計画通り進みます。長野の群馬周辺には精鋭部隊が配置されようとしていました。そんなに計画通り進むわけではないのですが、ある程度これは行われました。

また、本土決戦のための労働力、補助兵力の総動員には、6月23日には「義勇兵役法」が公布され、普通に兵役についていない人たちは、男性も女性も含め、国民義勇隊に編成されます。国民義勇隊は戦闘に際しては、国民義勇戦闘隊というものになって、軍の補助というか、戦闘のお手伝いをするようになりました。

しかし本土決戦は行われませんでしたので、戦闘のお手伝いをした民間人はいないのですが、沖縄では実際にそういうことをやった人はたくさんいるんですね。それから「国民義勇隊」という名前だけだというふうに言われるのですが、実は現実に関東地区でも国民義勇隊が道路の構築を行ったり、結構土木工事には動員されております。

3 本土決戦準備の実態

ここに実際に書きました「〈本土決戦〉準備の実態」ですけれども、「特攻兵器の生産と出撃基地を建設」を行いました。例えば「震洋」体当り用のモーターボート、それから「回天」人間魚雷、「伏龍」人間機雷とよばれるようなもので、アクアラングをつけて海の中に潜って、上陸しようとするアメリカの奇襲艇を海の中から竹竿の先に爆薬がついていて、それを突き上げて粉碎する。まあ、突き上げた人も粉碎されちゃう。そういう兵器と言っ

ていいのでしょうか、人間そのものが兵器ですね。これは実際に実戦では使われなかったんですが、当時のアクアラングは性能が悪く、訓練中に数十人亡くなっています。いまでも鎌倉の稲村ヶ崎に行った方は気が付かれる方もいらっしゃるかもしれませんが、稲村ヶ崎の岬には汚く、コンクリートで塗りつけたような場所があります。そこは実は機関砲が入っていた場所で、「伏龍」の基地だったんです。ですから米軍が上陸してきたら稲村ヶ崎の所から「伏龍」部隊が出動して米軍を攻撃する予定だったんです。

それは置きまして、作戦用道路、飛行場の建設が行われました。これは当時関東地区では、「富士リ号演習」と呼ばれて、大々的に戦車などが通れる道路を作りました。埼玉県などでは大規模に行ったんです。しかし「リ号演習」なのですが、作ったあとで、この道路を使うのは上陸していた米軍ではないか、ということで考えるようになりまして、また壊しました。もともとは実は浦和あたりに第36軍という決戦部隊を置いて、そこに戦車などを集中して、上陸してくる米軍を一端は上陸させて、やや内陸まで誘い込んでから反撃する。だから作戦用の道路が必要だったのです。要は、制空権が取れないので移動できない。移動できないと、結局綺麗に道路を作っても、どんどん米軍がそれを使って進行してきてしまっただけはいかん、と。

それから「沿岸部では陣地構築」を行いました。東京湾沿岸は、いまでも随分跡が残っています。それから「軍司令部機能・軍需工場の内陸部への移転」、特に長野県、群馬県では多くの軍事施設が移動します。登戸研究所も移転をしますし、中野学校も移転をします。

4 決戦準備と〈秘密戦〉関係諸機関の疎開・移転

登戸研究所は、1944年末から45年の5月にかけて疎開が行われまして、まず電波兵器（レーダー）関係は多摩陸軍技術研究所に統合されました。そして登戸研究所の本部・第二科・第四科、これはスパイ用品・時限爆弾の製造・生物化学兵器などの製造は、長野県伊那郡、現在の駒ヶ根市を中心としたところに移転します。第一科（電波兵器）これは「く号兵器」なんですが、電波の力を使ってこれを殺傷する兵器で、少し北の北安曇郡、あるいは関西[分廠]に移転をします。第三科（偽札）は、福井県の和紙の産地である福井県武生に移転の準備をしますけれども、印刷機そのものはなかなか動かすのが大変ですから、最後まで登戸で行っておりました。

「陸軍中野学校」は、教育の重点を遊撃戦、ゲリラ戦に移しまして、静岡県二俣町、現在の天竜市に二俣分教場を置きました。遊撃戦幹部の養成が目的です。そして、中野学校本部も群馬県の富岡に疎開してきました。実は中野学校とか登戸研究所が疎開した土地を見てみますと、結構重要な場所なのですね。これはあとでちょっと見ます。

5 本土での〈秘密戦〉準備

「本土での〈秘密戦〉の準備」は中野学校を中心に行われまして、「遊撃戦戦闘教令」の

案文が作られております。「敵中に潜入、奇襲、陽動、謀略工作、後方攪乱を主たる目的」とし、一般部隊を支援するための攪乱工作を行うということです。「薬物、細菌、時限爆弾（焼夷弾）などを使用」する。実は本土決戦に際しては、細菌、毒ガスの使用もある程度考えられていたようです。

これはちょっとレジメには書いてありませんが、昭和19年12月、天竜川下流の河川敷で毒ガスの雨下実験を行いました。雨下というのは、飛行機から雨のように降らせることを「雨下」というふうに言うのですが、このときは本当の飛行機から、本当の人間に対してイペリットガスを撒いているのです。下にいるのは本当の日本軍です。もちろん、日本軍は「ガス撒くぞ」というのは知らされているわけです。ですから完全防護で、毒ガスマスクをみんな持って、それでその上空に陸軍の飛行機がイペリットガスを撒きました。この時、もちろんみんな分かっていたので、すばやく防毒面をつけて助かったのですが、みんな防毒面をつけているかどうかチェックしていた小隊長だけがつけ遅れまして、重傷を負ったのです。小隊長が戦後、ちょっと悔しかったのでしょうね、こんなことがあったのだということを手記に書いたので、このことが分かりました。また、群馬県での赤城山の演習場では、毒ガスの演習を行ったようです。

登戸研究所では、やはり遊撃戦の準備が行われまして、第二科、毒物、薬物、スパイ用品、第四科は量産工場ですが、遊撃戦用の簡便な携帯兵器の開発・製造が重点的に行われました。ですから末期になりますと、登戸研究所は本当に多岐にわたるものを開発していたのですが、ある程度絞られるのですね。本土決戦に役立つものというふうに関心の重点が絞られます。

今回この企画展は、登戸研究所に勤めていた大月陸雄さんという技術将校の日記が出てきまして、移転の実態、それから重点開発されていた兵器について、断片的ではありますが分かってきたことがあります。当時の参謀部長の日記などと照らし合わせると、ここに出ているような兵器、例えば「研う」と書いてあるのは爆薬なのですが、「う」というのは「ウロトロピン」という薬品で、なんにでも充填できる粘土状の爆薬なのです。これは時限爆弾用です。

「マルケ」というのは、決戦の「ケ」なんです、熱戦誘導式の爆弾で、これを最後までやっています。熱源を目指して落ちていく爆弾なのです。赤外線誘導ミサイルは現在もあります、それと同じ原理なのです。戦車だとか船だとか、熱源があるものを狙って自動的に落ちていく爆弾です。これは実験段階で、作戦部長の日記に「もう少し」と書かれていたのですが、最終的には実用化できなかったのです。でも「マルケ」の赤外線誘導の技術は、ずっと登戸研究所でやってきたことなのです。もともとは熱源に向けて、鉄砲や大砲を向けるという自動小銃の装置開発は行われていました。これは現在、まったく実用化されている技術です。海上保安庁や海上自衛隊が、積んでいる機関砲の類で、みんな熱源追尾のタイプです。

それから最後の最後まで開発が続けられたのが「く号」で、怪力光線、怪力電波ですね。

実際はかなり北の方に北安曇郡の方に台座まで作り、パラボラアンテナのようなものを設置して、本土決戦に間に合わせようとしています。これと似たようなものを海軍が開発しておりまして、静岡県の島田にやはり台座を作っているのですね。もう少しで完成というところだったのだと思われませんが、実際には本土決戦には間に合いませんでした。

それから先ほど毒ガスのお話をしましたが、「細菌兵器」も場合によっては使われる可能性があったということです。なぜならば、長野県に大量の「石井式濾水機濾過筒」が運び込まれているという事実があります。これは写真で後から見ていただきます。結局本土決戦に際して、研究開発を行っていたという登戸研究所と、人材養成をやっていた中野学校というのは、だんだん融合していくんですね。地理的にも近づいてきますし、研究即製造、即、使用というふうにどんどん融合していきます。

登戸研究所が北安曇郡、伊那、中野学校がさらにその南の二俣、それからちょっと位置が違いますが、群馬県の富岡、これらは皆天竜川沿いに北上してきたときに結構重要なポイントとなるんですね。つまり本土決戦でどういうコースをたどって米軍が進行してくるのかをある程度想定すると、米軍を阻止する、重要な場所に登戸研究所関係がぼつぼつとあるんですね。それから関東平野の方から松代の方に攻め込んだりしますと、富岡というのがある重要なポイントになると思います。ですから松代を防衛するためにはやはり重要な拠点となるのです。ということで、一般部隊ではない、いよいよ松代防衛のための秘密戦を全面的に展開しようという場合には、こういう登戸研究所や中野学校というようなものを使おうというふうに考えていたように思われます。

[画面で第5展示室の石井式濾水機濾過筒を映して]これが昨年から資料館に展示を始めました、長野県伴繁雄さんのご自宅にあった石井式濾水機濾過筒です。およそ350本展示してありますけれども、実際にはこの倍、700本くらいありました。普通に、綺麗な水を作るための浄水器のカートリッジなのですが、考えてみると長野県辺りではそう必要ないんですね。水の汚い所、例えば南方あたりとか、中国大陸だとかですと威力を発揮しますし、まさにこのために石井式濾水機濾過筒は作られました。それで随分日本軍は助かった。しかし、本土決戦に際しては、沖縄戦の戦跡でも見つかっておりますが、なんで本来ならばお水の点でいえば、質の悪くない長野県にこれだけ持ち込まれたのか。当然衛生的なお水を確保するということがあったとは思いますが、場合によっては本土決戦に際して、細菌によって水を汚染するという、その場合濾過筒があれば、日本軍はお水を確保できるんですね。そういうことも、さきほどの毒ガスの例を見ると、最後の最後にはあらゆることを想定して準備をしていたというふうにも思われます。

[画面の石井式濾水機濾過筒拡大写真を指して]今回はポスターにもなっていますが、濾過筒には必ずこのように「軍事秘密」という文字が刻印されていまして、そのために一応兵器扱いで、戦後すぐに破壊されました。ですから、ほとんど残っていません。この濾過筒がまとまって残っている場所というのはほとんどなく、長野県で大量に残っていたというのは異例のことです。

おわりに

最後までめですけれども、本土決戦というフィルターから、秘密戦、登戸研究所からを見てきたわけなんですけれども、実はまだまだ分からないことがたくさんあります。なぜならば、秘密戦というのは、本当に秘密だからです。あえて記録を残しませんし、結局何かモノが出てくるとか、あるいは関係者が直接語ってくれるだとか、そういうことがないかぎり発表されない、ですから公文書として記録はありませんし、なかなかわからないことだらけです。しかしそうは言っても今回この企画展で、大月日誌、大月さんの日記が出てきたように、まだまだ知られていない資料というのがあるんですね。ですからそれが出てきても、もちろん断片的なものではあるんですが、それを組み立てながらこの戦争、秘密戦、本土決戦という記憶をパズルのような形で再現していく、ということです。

ますます戦争体験者が少なくなっているわけですから、とりわけこういう分野の記録というのは、残っていないわけですので、私たちが意識的に、組織的に残していく、そしてその成果を常に皆さんにお伝えしていく、ということをやっていきませんと、普通に放っておくと全て記憶は消滅してしまうということです。

最初にお話ししましたけれども、中野キャンパスが中野学校、生田キャンパスが登戸研究所という不思議なところを明治大学がキャンパスにしているということがありまして、ただそれを不思議だね、というのではなくて、それをどう生かしていくか、戦争というものの、あるいは戦争と科学技術あるいはそこで人間がどういう風が変わっていったらいいか。登戸研究所も、登戸研究所そのものではありませんが、中国大陸に出張して人体実験をやっております。そのときにはあまり何も感じないんですね。研究に没頭している、あるいは戦争だという大義名分があると、人間はどんどん普通の良心、価値観、倫理観を失っていったらいい。これは決して戦争の当時の人だから、ということではなくて、場合によっては常にありうることだというふうに思います。この戦争と技術、戦争と人材、価値観ということをこうきちんと直視していく、そのためにはですね、やはりこの資料館の様な所で、常にこう皆さんに検証していただきながら展示を豊かなものにしていく。そこからですね、秘密戦という特殊な分野ではありますけれども、そこから見えてくる戦争の本質というものをやはり多くの人に伝えていきたいというふうに考えております。

毎年ですね、このような企画展をこれからもやっていく予定ですし、また体験者の証言会というようなことも予定しております。節目節目にですね、戦争と秘密戦、登戸研究所、中野学校といったことについてお話をさせて頂ければと思いますので、今後ともまたよろしく願いいたします。

資料館、このように先月12月、開館以来3万人の来場者に来ていただきました。これからも内容を充実させていきたいと思っておりますので、一度来たらずっと同じだ、ということはありません。常に中の検証は行っておりますし、このように企画展も常にしております。

ですから、是非、二度、三度と来て頂いて、多くの方に見て頂ければというふうに思います。

段々研究というか本も出てくるようになりました。なかなか十分とは言えないんですけども、少しずつではあるんですけども、秘密戦ということがやや見えてきたかな、というところであります。また、中野学校のことにつきましても、これから資料館でも少しでも調べていければと、また、色々と皆様にも色々教えて頂きながら進めていきたいと思っておりますのでよろしくお願い致します。私が用意したお話は以上なんですけれども、せっかくなので、皆様からご質問やご意見等ありましたらこの際お伺いしたいのですが、いかがでしょうか。

質問者：登戸研究所とですね、石井部隊との関係はどのようになっているのでしょうか。

石井部隊、つまり 731 部隊、関東軍防疫給水部です。これはですね、陸軍の中では登戸研究所も 731 部隊も共に細菌戦に関係する部隊として位置づけされておりますけれども、役割分担があります。石井部隊 731 部隊は人間を対象にする生物兵器、例えばペスト菌とか炭疽菌、これを野戦で散布して使った。登戸研究所はその謀略工作のために密かに植物を枯らす、家畜を殺傷する、そのための細菌をやった、このような役割分担があるんです。がしかし、登戸研究所は毒物研究をやっている、この時は 731 部隊の監督下で中国人体実験を行っています。この点につきましては軍医学校なんかが間に入って 731 部隊、登戸研究所っていうのは、まさに手を繋いで兵器開発を行っていく、そういう形になっているんですね。役割分担はあるけれども、かなり密接なつながりがある、ということです。

質問者：本土決戦をする準備をする以上は相手を想定するはずだと思うんですけども、本土決戦で松代にそういう準備をする時に想定した米軍の出方というのは、アメリカ軍の動員兵器、使用する兵器というのはどう想定して戦争の準備計画を練ったのかを教えてください。

米軍のですね、上陸想定というのは、これは実際アメリカ側が想定したものと日本側が想定したものはそれほど大きな開きがありません。まず、もしあのまま戦争が続いていたら、昭和 20 年の 10～11 月にかけて、南九州にまず米軍が上陸してくる予定でした。米軍の規模としては 10～15 個師団ぐらいですね、規模で。九州を防衛している日本側がやはり 15 個師団。師団数が同じでも、火力が全然違いますので、これはなかなか防ぎきれないということを実は日本側もわかっていました。関東にやはり主力を集中しておりまして、特に大本営は九十九里方面から米軍が大挙上陸してくることを想定しておりました。やはりこの 15 個師団ぐらいの規模です。実際アメリカ軍は九十九里もそうなんですけど、米軍側の計画は相模湾からの上陸が主たる作戦になっていました。ところが日本側はどちらか

という九十九里を中心に防衛するという考え方だったんですが、しかし海岸線で防衛するのはほとんど難しいので海岸線に張り付けた部隊はほぼ玉砕、という風に考えられているんですね。内陸部にやや精鋭部隊を置いておいて、二段構えで作戦を行うということだったのですが、これもだんだん制空権が取れないということで、移動することが難しいというふうに考えだして、結局あんまり移動しなくて済むように、それも比較的海岸に近いところに移動して守りなさいということに、7月の段階くらいになるとそうなっていくんですね。そうすると一番最初に張り付けられている海岸の兵力と、そのやや内部にいる兵、そこから松代大本営まではかなりあいだが開いてしまうんですね。一般部隊、本土決戦用の部隊を二つに割って、海岸線に近いところ一つは松代に近いところと二つに分けて配置していく、一般正規軍の足りない部分を秘密戦部隊で穴を埋めていく。しかし当時の日本軍でも良く判っていたことなんですけど、計算すれば計算するほど、難しいというのか、火力のなさ、制空権のなさがやはり致命的でして、いくら兵力を集めても、移動できない兵力を集めていてもあまり意味がない。なかなか本土決戦計画というの、考えれば考えるほど実は難しいというのがわかってきてしまう、というのが最終段階です。ですから準備をすればするほど手詰まりになっていくという皮肉な結果だったと思います。

質問者：その場合、無駄な事、荒唐無稽な事と知っていて、松代で準備をしたのか、それとも何かやらなきゃいかんから、とりあえず無駄だろうけど、戦争したのかどちらですか。

日本側の唯一の頼みの綱というのは、アメリカ軍は戦争に勝つということがわかっていっているわけですね、勝つということがわかっていれば、なるべく人命は多くを失いたくない、なるべく日本側はアメリカ軍の人命を奪うという、特攻作戦なんかはその一環なんですけれども、なるべく人命を奪うという方向で作戦を行って、アメリカ側からどうせ勝つ戦争なんだから人命をなるべく失わないように、最後の段階で妥協してくる、そこを期待しているということなんです。出血作戦ですけど、日本側も大量出血するわけですけども、相手側にも出血を強要して、相手も、もうやめようと、どうせ勝ちなんだからやめようと思わせるというのが、最後、破れかぶれでありますけれども、そういう考え方です。

質問者：先生、この間本土決戦にどれだけの意味があるのかという質問させていただきましたけれども、作戦の時にはどんなものがあつたか、本土決戦、まるで戦国時代ではあるまいし、この狭い日本でそういうことが行なわれなくて実際に良かったと私は思っております。今後はすごく大変だったでしょうね、それでやってしまったら。今日はいろいろと話をうかがって、納得はしませんけども、理解することができました。ありがとうございました。

もし本土決戦が行われていたら、ということですが、これ本当にどうなったかわからないですよ。つまり、もし本土決戦をやってしまったら、天皇の権威も何も吹っ飛んでしまった虞があります。本土決戦をやらなくて日本軍の指揮命令系統が生きているうちに戦争を終わらせた、ということなので、戦後の天皇制の復活の足掛かりを得たわけですが、もしこれ本当に本土決戦やってたら、元も子もなく、木っ端みじんになっていたという可能性は確かにあります。そうなるとなかなか大変な事、国内がまた分裂してしまう、そんな虞も出てきたのではないかというふうに思います。それにあの普通そこまでやらないとか、ドイツは最後の最後までやりましたが、ドイツと日本はそこまでやったんですけど。イタリアは、イタリア本土に上陸するとほぼ同時に降伏しているんです。イタリアでは本土決戦という考え方はしておりませんでした。その結果、どうなったかという、イタリアは実は敗戦国ではないんです。なぜかという、最後のムソッリーニ政権が崩壊して、その次にできたバドリオ政権、ドイツに向かって宣戦布告するんです。そうするとイタリアは第二次世界大戦の戦勝国になっちゃうんです。敗戦国を免れちゃったんですよ、三国同盟を結んでいたにもかかわらず、イタリアだけは戦犯裁判もなければ何もありません。当時の日本ではイタリアがあっけなく降伏してしまって、それを非難する論調が強かったんですけども、そちら[イタリア]の方が知恵があった。ただ知恵はあったんですけど、イタリア人にとって不幸だったのは、イタリア人は降伏したのに、イタリアの土地でドイツ軍とアメリカ軍はずっと戦争続けるんです。ですからイタリアの国土は、イタリアは戦争から離脱したはずなのに戦闘が続いてしまうという、文化的な遺産が破壊されてしまうということが起きてしまいます。

質問者：対ソ連戦をどういう風に考えたらいいか。

実は対ソ連戦は陸軍の中でも2つにわかれておりまして、対ソ連戦が現実のものと考えていた人達と、実は、ソ連とは組めるんだと、つまり、アメリカ、イギリスとソ連というのは絶対に仲間割れするに違いないと、こう考えていた人達がいます。実はこの秘密戦なんかを考えていた人達は意外にそういう人達が多かったんですね。イギリス、アメリカとソ連は必ず仲間割れをする、ただその仲間割れした時に日本はうまく、それに乗じて敗戦をまぬがれるんだと、こういう考えの人もいました。しかし現実をリアルに見ている人はですね、ヨーロッパの戦争が終れば、当然ソ連の戦力は極東に向けられて、矛先が日本に迫ってくる、ということは、数の上で、つまり見ていればどんどん極東のソ連軍の数が増えていってまして、そこをリアルに見ていた人達は、そんなに国際情勢が甘いもんじゃないと分かっていた人もいます。一部、陸軍の中にはですね、謀略工作に頭が慣れてしまって、世の中謀略で動いているんだっていうですね、そういうことから、結果として荒唐無稽の謀略を思いついて、それに期待をかけるという、非現実的な戦略に傾斜していた人たちも結構いた、ということで、実は、ソ連を仲介にした和平論というのは、戦争終結派も

明治大学平和教育登戸研究所資料館第4回企画展 記念講演会リライト
「本土決戦・登戸研究所・中野学校」 講師：山田朗（当館館長・明治大学文学部教授）
2014年1月11日 於：明治大学生田キャンパスメディアホール

戦争継続派も一緒になって乗っちゃったプランなんです。これ天皇を含めて、みんなソ連軍を仲介した和平論に一同乗ってしまうという厄介なことが起きて、そのために、天皇自身は5月の上旬にはもう無条件降伏しかないな、ということを側近に言っているうちに、その後ソ連を仲介した和平論に流されてしまって、結局そうこうしているうちにポツダム宣言が出たりして、きっかけを失って、ソ連に話し合いを求めているうちにソ連が攻め込んでくる、そんなことになってしまうんですね。

全てに人にお答えできなかったんですが、この後私資料館に戻りますので、資料館で質問受けたいと思いますので、今日はこの場で終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。